
魔界戦記ディスガイア OROCHI

laziness

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界戦記デイスガイア OROCHI

【Nコード】

N9579L

【作者名】

l a z i n e s s

【あらすじ】

そこはどんな海よりも深く、どんな闇よりも暗い場所にあるという。

闇に魅入られた禍々しい者どもが集う暗黒世界——。

彼の地がどこにあるのか。

それは定かではない。

しかし、誰もが心の奥底でその存在を信じ、畏れていた。

それが魔界——。

天界、そして、人間界と共に三界を構成する邪悪な闇の世界。

だが、その魔界は一つではない。

幾多の別魔界があり、幾多の魔王がそこにはいた。

そして、その一つの別魔界において、ある咆哮が轟く。

それはやがてあらゆる時空へと干渉し、天界、魔界、人間界を巻き込んだ戦いへと繋がっていった――。

おいでませ無双世界 その一（前書き）

*この作品は、魔界戦記デイスガイア、戦国BASARA、真・恋姫？無双、無双OROCHIのクロス作品です。

*この作品には、多数のオリキャラが登場します。苦手な方はご注意ください。

おいでませ無双世界 その一

バタバタッ、ドンドンッ！

「殿下ー！ 起きてますかー？」

ノックの音も騒々しく、駆け込んできたのは黒のレザーでびっしり固めたスレンダーな少女。年の頃は一五歳くらいだろうか。

赤毛を左右でまとめ、爆発させたようなヘアスタイル。それ以上に目立つのは背中の黒い翼とオシリのシツポ。

「なんだエトナ、騒々しい」

棺桶の形というよりも棺桶そのままの御影石のベッドから上半身を起こしているのはエトナと呼ばれた少女よりも少し年下の少年。

濃紺の髪がアンテナの様に前に二本飛び出している。短パンに赤いマフラーと云えば、魔界では知らぬ人のいない魔王ラハールだ。

「あれ？ 起きてた」

「お前が起こしに来るたびに寝ているわけにはいかん。 物騒だからな」

こめかみの辺りをポリポリとかきながらラハールが言う。

「いやだなー、殿下ー。 あたしが殿下に何かするわけないじゃないですかー」

アハハと笑いながらエトナは手をさりげなく後ろに回した。

「後ろに持っているものはなんだ？」

「え？ ヤだなー、殿下ったらー」

思いつき引き攣った笑い。

「おまえなあ……」

そこまで言いかけて、ラハールは面倒になったのか話題を切り替えた。

「で、何の用だ？ オレ様の安らかな睡眠を中断しようとしたからにはそれなりの事件であろうな」

「あ、そうそう。 大変ですよ殿下」

思い出したように手を合わせてエトナが言った。

「別魔界から侵略されちゃいました」

ちよつと買い物出かけてました、みたいに云うエトナ。
対してラハールはきっかり十秒黙って、顔を俯かせた。

「フッフッフ……」

腕を前で組み、肩を震わせて小さく笑みを零す。

「ハアゝッハッハッハッハ！！」

部屋どころか城中に響いたであろう高笑いをしてラハールは大笑した。

「このオレ様にケンカを売るとは、とんだ命知らずもいたものだ！」
数百年以上まともな戦いをしていないラハールにとって、昨今の退屈ぶりは尋常ではなかった。
これ幸いとはかりにラハールは肩をいきり立たせ、久々に浮かべた嬉々とした表情で笑いを続けた。

「何ですか？ 騒々しい……」

と、そこに濃い茶髪の青年が頭を掻きながら現れた。
袖無しの上とヘソ出しルック、首元に一部の悪魔にしか許されない秘宝であるインペリアルを下げた青年は部屋をぐるりと見回してから嘆息を洩らした。
それを見止めたエトナが青年を呼び寄せる。

「あー、アッシュ。 ちょっとみんなを集めてくれるー？」

「……全員を、ですか？」

正気か、とでも言いたげにアッシュが問うと、エトナは小悪魔チックな笑みを浮かべて告げた。

「もー、当たり前でしょー」

「……何処に戦争にいくつもりですか」

ラハール、エトナ、そして今ここにはいないもう一人の悪魔——正確には元天使で正式には堕天使なのだが——を中心とした軍勢は、今や魔界最強と云っても過言ではない戦闘力を誇る。

その全てを結集しろ、というのだから、戦うのは別の魔界全土か。
はたまた超時空の宇宙最強魔王か。

いずれにしても彼の胃が痛くなるのは必然だろう。

朝食を終えて、ラハールは玉座の前に自分が誇る最強にして忠実な精鋭部隊を揃えた。

玉座の両脇には欠伸を洩らすエトナとフィギュアを弄るフロン。

眼前にはラハールの弟子第一号にして最古参である——元は『戦士』だったが今や『魔界勇者』となった——アツシュを含め十人の部下。更に後方ではエトナの部下のプリニー隊が整列していた。

「時空の渡し人の話だと、超広域で時空干渉が発生したらしく、それで出来た空間の割れ目から奇妙な連中がどんどん侵攻を開始しているようです」

弟子の中で一番年長且つ纏め役であるアツシュが代表して云う。

「レベルは現在確認されているもので20から80までマチマチで、レベル100前後の敵はごく僅かしか確認されていません」

報告を聞くうち、ラハールは苛立たしげに触角を揺らす。

「なんだ。魔神クラスの敵はいないのか？」

「先触れでそんな連中が来たら大変でしょう」

呆れた様に呟くアツシュ。その後ろで腕を組みながらゴツイ顔を顰めてジンが言った。

「何を云う！ 戦う以上、全力を以て相手をする事こそが礼儀であ

ろう!!」

元『格闘家』の血が騒ぐのか、好戦的な怒声を飛ばす。最も今では『究極超魔神』なのでその怒声も威力を増し、後ろにいたプリニの内の二匹くらいがビクリと震えた。

「その通りだ! よくわかっているなジン!!」

ラハールも同意見なのか、高笑いしながら言った。

「あの……アッシュさんが困ってますけど」

ふわふわした白い服と黒い翼、巨大な赤いリボンを頭に飾った出で立ちの金髪の少女がおおずと云うと、ムツとした表情になりながらもラハールは咳払いをして鷹揚に手を振った。

「続ける」

「ハツ……で、各地の状況なのですが」

話を戻すアッシュを尻目に、エトナが愉快気に囁いた。

「フロンちゃん、やるわね!。あの殿下を大人しくさせるなんて」

何処か嬉しそうな、何処か棘を含んで呟く。

「こりゃ、あたしもウカウカしてらんないかなー?」

「何だと~~~~ツ!？」

突然響いたラハールの声にエトナの呟きはかき消され、何事かと思いいエトナは視線を戻した。

「どうしたんですかー、殿下ー。あんまり騒ぐとセラちゃんとかルナちゃんが泣いちゃいますよー?」

「これが騒がずにいられるかーッ!」

ウガーツ! となりながらラハールが叫ぶ。

「どしたの? アッシュ」

「……ですから、魔界に侵攻してきた連中は粗方片付いちゃってるんですよ」

「あちゃー」

思わず頭を抑えながらエトナが洩らす。

「先触れというのもあるでしょうが、恐らくは雑兵だったのが原因かと思われます」

次いで進み出ながら報告したのは、エトナの弟子セリイ。職業こそアッシュより上位の『スペース戦士』だが、戦闘力では彼にやや劣る。生真面目且つ実直で仲間を思いやるという、とても悪魔とは思えない程に人情味に溢れた女性である。

ちなみにベルトを巻いて必要最低限に覆っただけの胸部はエトナより大きい。

「雑魚にラハール様の御手を煩わせる必要ありません。ラハール様は堂々と、強敵たる者と剣を交えて下さい」

更にアッシュを挟んでセリイの反対側に歩み出たのは流れる様な黒髪と古風な出で立ちが印象的な女性、しぐれ。単純な剣の腕前だけならラハールにも匹敵する彼女は誰よりもラハールに忠実な弟子

であり、その職業は前線では最高位の一つでもある『シヨウゲン』という高位。

最も、サラシを巻いただけの胸部のせいでラハールはあまり傍には置かないが。

そして忠実すぎるあまり、彼女は変な方向で時たま暴走する。例えば、つい先程まで侵略を続けていた勢力をたった一人で殲滅してしまったり。例えば、辺境に現れた敵部隊にいきなり一文字スラツシュを叩きこんだり。

「ええい、貴様が出たら大抵の敵は倒せてしまっただろうが！」

「何と……！ 勿体なきお言葉に御座います、ラハール様。不肖しぐれ、ラハール様の御心を煩わせる者共を更に討滅して参ります」
「ちがーう！ 何処をどう取ったらそうなる！？」

ラハールの怒声も虚しく、しぐれは深々と頭を垂れる。

見慣れているのかももうどうでもいいらしく、エトナはシッポを揺らしながら質問した。

「それより殿下ー、どうするんですかー？ 敵がないんじゃ折角集めたのに戦いようがないじゃないですかー」

「何を寝ぼけた事を言っている」

玉座に深々と腰かけ直し、ラハールは口元に悪魔らしい歪な笑みを浮かべた。

これから自分が言う言葉のあまりの楽しさに堪え切れないのか、小さく笑いを洩らしている。

「向こうが攻めて来れたと云う事は、当然ルートが残っていよう？ ならば今度はこちらから攻めてやるまでの事だ！！」

ラハールは数百年ぶりに、腹の底から大笑した。

「ハアゝッハッハッハッハッハッ！！！」

おいでませ無双世界 その一（後書き）

どうも初めまして、l a z i n e s sと申します。ネームは和約すると「怠惰」を意味します。

ダラダラのんびりな更新になると思いますが、どうぞ宜しく願います。

おいでませ無双世界 その二（前書き）

*登場キャラの大まかな設定は、後書きの方にちよくちよく載せていきます。ある程度まとまったら、別に纏めて投稿する予定です。

おいでませ無双世界 その二

城の広間には、時空の渡し人が巨大なゲートを開いて待機していた。ラハール達の姿を見止めた彼女が小さく礼を取ると、ラハールは鷹揚に手をかざした。

「ゲートは開いたのか？」

「はい。ただ、かなり高レベルの干渉があり精密な調節は難しいので、向こうのゲートの入口がある世界に繋がります」

申し訳なさそうに云うと、何故かフロンが口を挟んだ。

「成る程、ラスボスとは直ぐに戦えない仕様なんですね？」

「おまえはそのオタクな思考をどうにか直せんのか」

呆れた様にラハールは呟く。

「何言ってるんですかラハールさん！ RPGの基本は、まず仲間を集める事に始まるんですよ！」

握りこぶしを作り、目をキラキラさせながらフロンが叫ぶ。

「そして共に戦い、冒険し、時に別れ……そうして心身共に強くなつて、初めて主人公はボスと相まみえるのです……！」

最早自分の世界に入り浸ってしまったフロン。その背後に一陣の風が舞い、次の瞬間フロンの頭にハリセンが飛んだ。

「いたッ！」

「……………」

頭頂部を抑えながら涙目でフロンが振りかえると、案の定そこには自身の弟子の一人であるザンが手にハリセンを携えていた。首元にロングマフラーを巻き、一部の感情も浮かべない顔は、しかし何処か呆れを含んだ視線をフロンに向けていた。

ちなみに彼も今回の遠征軍のメンバーの一人である。

「弟子にドツかれるって……」

「おまえ、相当アホだろ？」

エトナのラハールから憐れむ様な視線を向けられ、フロンは必死になって否定する。

「違いますーっ！ザンさんが真面目過ぎるんですー！」

「……………」

そんな事無い、とでも言いたげにザンは視線をラハールに向ける。

次いでフロンも、ラハールさんは分かってくれますよね？ と期待を寄せる様な視線をラハールに向けた。

「ええい！ そんな事はどうでもいいから、さっさと行くぞー！」

「あ、逃げた」

両者からの視線に耐えきれなくなったのかラハールが叫ぶと、エトナが小さく呟く。

それをあえて聞かないつもりなのか、ラハールはいの一番に時空ゲートに飛び込んだ。それに続く様に次々のゲートを潜り、目標の時空へと向かおうとする。

だが――

「――ッ！？超大規模の時空干渉！！！」

時空ゲートの中に飛び込んだラハール達は、直後に響いた悲鳴にも似た渡し人の声を最後に白い光と凄まじい轟音に包まれた。

同じ頃、遙か彼方の天界でも、同様の勢力による侵略が行われていた。

「……ふう。　どうやら、大分片付いたようだな」

最も、此方は迅速に出撃した天使兵達によって殆ど鎮圧され、時空の裂け目もほぼ全てが閉じられていた。

肩に世界最高峰の名槍・ゲイボルクを担ぎ、最上級天使にのみ許された二対四翼の大翼を翻して鬱陶しそうに呟く彼は、大天使ラミントンの神殿を警護する守護天使隊のリーダーである。

赤紫色カメリアの長髪を風に靡かせながら、ふと視線を虚空に向ける。すると上空から同じく四枚の翼を羽ばたかせ、一人の男性が降り立つ。白いローブを纏い、にこやかな笑みを浮かべる長身の青年。

大天使ラミントン――その人である。

「お疲れ様でした、ルシファー」

額に汗一つ掻かずそうのたまうラミントンを胡散臭げに睨みつけながら、ルシファーは虚空にゲイボルクを仕舞う。

「しかし、思った以上に彼らは侵攻を進めているようですね」

「ああ」

「天界の各所でも戦火が上がっていますし、天使兵に命じて救援に向かわせましょう」

「ああ」

「聞いていませんね、ルシファー」

「ああ」

凄くどうでもいいといった感じにラミントンの話を聞き流すルシファー。

もしこれが一般の兵の行いであれば、問答無用でラミントンの近衛兵に切り捨てられる事だろう。

「ではルシファー。貴方は人間界に向かって下さい」

「ああ……はあ!？」

ラミントンの言葉にルシファーは慌てて振り向く。

「ではお願いします。私は他の場所に向かわねばなりませんので……」

「ちょ、ちょっと待て！ 何でおれが、よりもよって人間界なんぞに行かねばならん!？」

「今『ああ』って了解したじゃないですか」

「してねえよ!」

だがルシファアの反論もどこ吹く風とばかりに受け流し、ラミントンは一つのゲートを指差す。

「あのゲートから別次元の人間界に向かって下さい」

「聞けよ！」

「人の話を聞かない様な人の話を聞くつもりはありませんよ」

につこりと、絵画の様に満面の笑みを湛えてラミントンは言う。

「てめえ……それでも大天使か」

「ええ。 これでも大天使です」

しばし睨みあう両者。 といっても、ルシファアが一方的にギロリとした視線をぶつけているだけで、ラミントンは柔らかな笑みを湛えているだけだった。

そうして十秒きっかり睨み続け、ルシファアはため息を洩らした。

「……分かったよ。 行けばいいんだろ行けば」

「はい。 お利口さんですね」

「子供扱いか！」

パチパチ、と手を叩くラミントンに思いっきり怒鳴るルシファア。しかしさあとはぐらかされてしまい、代わりにこれでもかと顔を顰めて見せた。

「一応、装備は万全を期して下さい。 何があるか分かりませんので」

「おいおい、てめえは側近の実力も推し量れないのか？」

「人間界には、サルも木から落ちるということわざがありますから」

涼しい顔をしながらラミントンは言う。

「では、お願いしますね」

「……へいへい。分かりましたよ、っと」

言いながら、ルシファーはゲートをくぐってさっさと行ってしまった。

その背が、渦を巻くゲートの中に完全に消えるまで見つめていたラミントンは、小さく呟いた。

「——頼みましたよ。ルシファー」

「——落ちているな」

「落ちてますね」

「うむ」

「そうですねえ」

身を切り裂く様な風を全身に感じながら、ラハールとアッシュ、ジョンとセラの四人はそうぼやく。

「このまま落下したら死んじゃいますね」

「駄弱なり」

「どうしよう?」

「のんびりしている場合か! 各自、体勢を整える!!」

ラハールの一喝に、漸くといった感じで四人は動きを再開する。

アッシュとジンは頭から落ちていた姿勢を足が下になるようにして、魔法使いのセラはウィンドを唱えて落下速度を遅くする。

ラハールはマントを羽の様に広げ、ふわりと落下した。

数秒後、前者二人は豪音を立てて着地成功。後者二人はその後でゆっくりと着地した。

「で? どこなんだ此処は」

周囲をぐるりと見回しながらラハールが言う。

草木が鬱蒼と生い茂る樹海は昼間と思しき時間だというのに薄暗い。

「さっき、落下しながら見た限りではこの近辺に街とか城とかはなかったみたいですね」

「我らが知る人間界に非ず」

「お仲間さんがいるって訳でもなさそうですしねえ……」

周囲の魔力を探りながらセラが言うと、これでもかというくらい大きなため息をラハールは洩らした。

「何だ。敵はいないのか」

「敵つつつか、エトナの姐さんやフロンさんもないみたいですけどね」

埃を払いながらアッシュがぼやく。

「こちらの世界に来る際の時空震が原因だろうな」

「けどけどお、別世界に落ちたーって事はないと思いますよお？」

「無論。されど現状にて、再会する術はなし」

セラの言葉にジンも頷く。

戦闘の時もこれくらい冷静でいてくれたら俺も助かるんだけどなー、なんて呟きをアッシュが胸中で洩らしている事に誰も気づく事はない。

それくらい、ラハールもジンも戦闘^{ケンカバカ}狂なのである。

「——ムッ!?」

刹那、誰かの声が響く。

次の瞬間にはラハール達は先程まで立っていた場所を飛びのき、各々に武器を取り出していた。

「何者だ!? このラハール様にいきなり斬りかかる無礼者は!」

魔王剣を片手に持ちながら叫ぶと、地面に剣をめり込ませていた人物が顔を上げる。

「その異形の出で立ち……貴様らも、遠呂智の同朋かっ!」

叫び、女性は凄まじい速度で突撃する。

下段からの逆袈裟斬りに対し、ラハールは滑る様にして後ろに飛び退いた。

——途端、両者の間に黒い影が飛び込む。

「なっ!?!」

「名乗りもあげぬ無礼、突如斬りつける愚行……全て許し難し」

黒色の刀身を素手で鷲掴みにしながら、彼——ジンはその形相に般若に変貌させる。

「名乗れい! 人間の娘よ!! 我こそはジン、魔王ラハールが第二の弟子にして、無双の拳達なり!!」

ジンの怒声を至近距離、しかも真正面から浴びながら、しかしその女性は何も言わず。

「魔王の下僕が……! この夏侯元讓が刃、七星餓狼の鎧にしてくれる!」

夏侯惇、字を元讓。

これが、聞く者が聞けば震え上がる、曹魏第一の刃と——

「ほざけ! 我が拳の前に、穿てぬは無きと知れい!」

魔王一行との、最初の邂逅だった。

おいでませ無双世界 その二（後書き）

ラハール 魔王

突如として侵略を開始した別次元の魔王・遠呂智にケンカを売りに現れる。天上天下唯我独尊、けれどちょっとは他人を思いやる様になった…のか？

アッシュ 男・魔界勇者

ラハールの弟子第一号。元『どうしようもないクズ』にも関わらず主戦力。転生し戦闘力は最高ランク。みんなのまとめ役。

ジン 男・究極超魔神

ラハールの弟子第二号。元『どうしようもないクズ』の格闘家。普段は比較的冷静だが、戦闘になると無駄に熱い。

セラ 女・星魔法使い

ラハールの弟子第四号。元『どうしようもないクズ』の赤魔法使い（女）。おっとりのんびりとした性格。

ルシファー 超級天使兵

ラミントン直属の近衛兵で、彼の側近。遠呂智の動向を探りラハール達を援護する為に遣わされた。

ラミントン 大天使

天界の長。突如として侵略してきた遠呂智の動向を探るため、ルシファーを遣わす。

てなわけで第二話です。

戦闘シーンはやっぱり不得意だ……orz
そしてキャラが何か性格
変わってる気がする。

次回はエトナのグループが主役です。

おいでませ無双世界 その三（前書き）

*キャラ設定は、事前の予告なく変更する場合があります。注意して下さい。

おいでませ無双世界 その三

一方、エトナ達とは云えば……

「ったーくもお、なーんで陛下達はいつもとっか行っちゃうのかなー！」

呆れた様な声でエトナは大きな字に寝転がる。

杭瀬川の畔には他に数匹のプリニーが走りまわっている。

「はぁ……っーか、何処よここは」

青々とした空を眺めながらエトナはぼやく。

魔界の空とはどこことなく違うその空が、この世界が確実に異世界である事を雄弁に語っていた。

「あーくそ……暇だ」

川にプリニーが落ちたのを視界の端に見止めると、面倒臭げにエトナはメガクルルを唱え川の一部を氷結させる。

それに巻き込まれ、助けようとしたプリニー諸共川は凍りついた。

「そいつら、回収しておいてねー！」

言って、エトナはごろんと寝返りを打った。

——と、視界に一人の人物が映る。

「……………」

年の頃は17、8と言った所だろうか。

魔力がない処から、恐らくは人間だろうとエトナは当たりをつける。

しかし——何故かは知らないが、エトナは妙に興味を惹かれた。

自分に向かって真っ直ぐに歩いてくるその人物は、近付くにつれて徐々にその容貌をハッキリさせてくる。

「はあ……人間にしちゃ結構な顔の作りしてんじゃん。ゴードンとは大違い」

もう100年以上会っていないラハールの元下僕を思いだしながらエトナが呟く。

と、丁度エトナの目の前で彼は足を止めた。

「……………」

「……初対面の相手を上から見下してんじゃないわよ」

無言を貫く青年を睨みつけながらエトナが言う。

「女、何処から来た？」

「うわっ、何そのオレ様発言。陛下じゃあるまいし、初対面の相手にそんな口効く奴いたんだ」

「初見の相手を早々に毒づく奴に言われたくないな」

フツ、と鼻を鳴らしながら青年は呟く。

「何よ？ アンタあたしに指図しようっての？」

「指図する謂れも、つもりもない。ただ僕の問いに、僕が満足するに足る答えを示せ」

「うわぁ……. どんだけ自信過剰なんだよコイツ」

呆れながらエトナがぼやく。

「で、何処から来た？ 名は？」

「エトナ、魔界から来た魔神よ」

「魔神？ 魔王ではないのか？」

「いや、魔王は今のところは陛下だけだって」

こういった相手は、とりあえず表層だけでも言う事を聞いておく方が良い。

長年の処世術からそう判断したエトナは、テキパキと質問に答えていった。

「その陛下というのは、遠呂智の事か？」

「誰よソイツ？ ラハール陛下よ、ラハール陛下。 魔王クリチエフスコイ様の息子の」

言い終えると、青年は顎に手を当てて何やら黙考し始めた。

「……つまり、お前は遠呂智の云う魔界とは別の魔界から来た、という事か」

「少なくとも、そんなみよーチクリンな名前の魔王は聞いた事ないわ」

「成る程。 確かに王が一人しかいないというのも浅慮だったか……異なる世界というのなら、当然複数あってもおかしくない……」

……

「ちよ、おーい……. 聞いているー？」

何やら自分の世界に入りそうな青年に呼びかけるエトナ。

しかし青年はまるで反応を示さず、ひたすらブツブツと何かを呟いている。

「……駄目だこりゃ」

呆れて、肩を竦ませながらエトナは嘆息を洩らした。

「……………ハア」

杭瀬川の畔にある小高い丘。

そこに座りながら、かえではため息を洩らした。

「……………何処行つたのよお、アッシュ」

戦闘時には最前線でその拳を縦横無尽に振るう武神でもやはり乙女。特にフロンが愛を持ち込んでからというものの、その恋心を自覚してしまったかえでは付き合いの長いアッシュの事をいつも気にかけていた。

「……………むう」

ラハールの弟子三号としてメイキングされてから、主力の一人として数多くの戦闘を経験してきたかえで。その傍らには、常にアッシュの存在があった。

単純に連携攻撃が出来る、といった理由で当時格闘家だったジンも一緒に事が多かったが、それでも敵陣に斬り込む時は常に彼の傍で共に戦ったものだ。

「……それは、恋ですね。　かえで様」

「うん………うん？」

誰かの声が聞こえた。

反射的に横を向くと、そこには同じ様に座りながらこちらの様子を窺う少女が……

「って！？　ちょ、うええ！？」

「言葉ははつきり発音しましょうね、かえで様」

そうニコニコ笑顔でのたまうのは、銀河魔法使いのルナ。

各種魔法使いを極めて転生を繰り返した結果、遠距離攻撃において彼女に並び立つ者はいないとされる程の魔法の名手である彼女は、エトナの弟子でもある。

そう——要するに彼女の性格は一言でいってしまえば小悪魔。色恋を信じる信じないよりも、より自分が楽しめる状況に持つていこうとするタイプなのだ。

そして更に残念な事に、かえではそんなルナの性格にこれつつっぱっちも気づいていない。メイキングされた当初、マナ不足もあって『どうしようもないクズ』として生まれた彼女は、そのマイナスポイントを全てINTかしこみに向けた。

その後幾度となく転生を繰り返したものの、ポイントは全てATK

（攻撃力）につき込んだ。
結果、知能皆無だか近接戦においては無敵を誇る戦乙女の誕生である。

「かえで様！」

「う、うん？」

「恋とは……愛とは戦争なのです!!」

グツと、胸の前で握りこぶしを作りながら力説するルナに若干気押されつつも、かえではとりあえず頷く。

「純愛も友愛も略奪愛も全ては戦争！ 強者こそが勝者ではなく、勝者こそが強者なのです!!」

「う、うん……」

「いじけて立ち呆けている臆病者に、真の勝利は掴めないのです!!」

「うん……」

「故に！ かえで様はもつと積極的にアピールすべきなのです!!」

びしいっ！ と効果音が鳴りそうなくらいに鋭く指を指す。

「そんな事では、セラちゃんにアッシュさんを奪われてしまいますよ!？」

「ツツツ!？」

その指摘はかえでにとっては痛打だった。

確かに最近仲いいけど……、とか、そういえばこの間はあの子の盾になってたっけ……、とか、色んな記憶が浮かんでは消えていく。

「そう、だよね……」

「はい！」

「うん。そうだ……！　このままじゃ駄目だ！　よおしっ！！」

パン、とかえでは自分の頬を叩く。

「ありがとうルナ！　お陰で目が覚めたよ！！」

「いいいえ。かえで様の幸せを願えばこそです」

「よっしゃあつ！　待ってなさいよアツシュ！！」

一人気合いを入れるかえでは、気づく事はなかった。

ルナのオシリに、彼女の師匠の様な悪魔のシツポが揺れていた事に

……

一方、その頃――

「よいしょーっす！」

「おりゃーっす！」

「ファイトーっす！」

「いっぱーっすす！」

プリニー達は頑張って、氷漬けにされている仲間のプリニーを引き

上げようとしていた。

と、そこに、

「あ、ザンさん！ 手伝ってほし——」

『二陣』の暴風が舞った。

「……………何奴」

「……………」

一方は、首元にマフラーを巻き、半身となつて拳を構えるザン。
他方、白と黒を基調とした忍装束に身を包み、一対の短剣を構える男。

「……………無答。ならば、滅する」

「……………」

男は片手を前に出し、指を動かす。

—— かけて来い。

言外の挑発は、しかし確実にザンの闘争心を刺激した。

「……………笑止！」

「……………」

刹那、暴風が再び舞う。

「——三連激——」

忍対忍の戦いが、幕を開けた。

おいでませ無双世界 その三（後書き）

エトナ 魔神

ラハールと一緒に別次元へ向かった…筈が何故かはぐれた。実は魔界一強かな魔神。お付きのプリニー軍団も健在。

かえで 女・武神

ラハールの弟子第三号。アッシュに恋心を寄せている。彼と仲のいいセラをライバル視している。

ザン 男・仙忍

フロンの弟子。彼女の趣味から元『落ちこぼれ』。その後独力でマナを溜めて転生、『天才』となった。一番冷静なツツコミ役。けれど闘争心はジンといい勝負。

ルナ 女・銀河魔法使い

エトナの弟子。各種魔法使いを極めており、攻撃魔法全種を極めた遠距離戦最強の魔法使い。小悪魔属性。けれどここ一番で大ポ力をかますドジっ子

この作品にはオリキャラは多数登場しますが、オリ主にはなりません。途中オリキャラメインの展開になるでしょうが、オリ主にはありません。

大事なことなので二回言いました。

今回はフロンのグループ。あの男も登場!!……………予定。

おいでませ無双世界 その四（前書き）

*一部、キャラの性格に若干の差異があるかもしれません。

おいでませ無双世界 その四

「ラハールさん！ エトナさん！」

その頃、フロンは一人で樹海を彷徨っていた。

「もう、二人とも私がちょっと目を離れた隙に迷子になっちゃうんだからー」

厳密に言えば、ゲートを通っている最中に起きた原因不明の時空干渉によってバラバラに落とされたのであって、決してフロンが監督していた訳ではない。

「仕方ない人達ですねー……………ん？」

遠くの方から響いた物音に、フロンは小首を傾げた。
次いで轟音と共に響き渡る、何やら猛々しい男の声。

「なんででしょう？」

とりあえず、フロンは行ってみる事にした。

「——どううりやああああ——！！！」

「ぐぼお!!」

「でええええいい!!」

「ぎゃわっ!!」

幾重にも群がり、一人の男を囲む異形の者達——遠呂智軍の尖兵である。

それが、飛んでいる。

比喩とかそんなのではなく、文字通り飛ばされている。

「天! 覇!! 絶!!!! 槍!!!!!!」

二槍を自在に操り、振り回し、紅蓮の炎を纏って暴れまわる青年である。

茶色の短髪に赤い鉢巻と、見た目にも活発そうという印象を与えるその青年は、内実活発を通り越して暴走気味である。

「遠からん者は音にも聞けい!! 近からん者は目に物を見よ!! 武田が将、真田源次郎幸村これに在り!!!!」

万兵を圧する勢いの覇気に、周囲を囲む遠呂智軍は思わず尻こみする。

「闘魂!! ぜっしょおおお!!」

今にも走りださん勢いの大音声で叫ぶ幸村の声に、一番近くで囲んでいた兵士数名は耳を塞いでその大声に耐えた。

「くそっ! なんつーバカ声だ!! あア?」

「か、カツコイイ!!!! あれが男版のサムライってやつですか

！？」

何か隣にいた。

かなーり後ろの方に待機していた遠呂智の兵士数名の心中が、一緒になった瞬間である。

幸村は混乱していた。

今朝方、いつもの様に鍛錬を終え、朝食を終え、師匠である武田信玄との訓練に勤しんでいた幸村。

しかし、突如として襲った凄まじい地震と、次いで天より降り注いだ巨大な光の柱に吞まれ、気がつけば何処とも知れぬ樹海に一人転がっていた。

暫しそうして、木々の間から覗く空を眺めていた幸村だったが、唐突に鼻の奥を突いた匂いに身体を起こした。

—— 猛烈な異臭。 血のおいである。

草木をぶち抜き、木々をへし折り、そうして凄まじい勢いで駆け抜けた幸村の目に飛び込んできた光景は—— 蹂躪され、殺される人

の姿だった。

泣きじゃくる幼子が死んだ。

子を庇っていた母親が殺された。

武器を持った男が刺された。

鼓膜を打つ、不快な下衆共の嘲笑。

幸村の中で何かがキレた時、既に周囲には屍の山が築かれていた。

「ハア……！　ハア……！　ハア……！」

既にどれだけ戦っただろう？

どれだけの敵を殺しただろう？

元々考えるより感じるタイプの幸村にとって、それは酷く難題に思えた。

だが――

「まだまだ……！　まだ幸村の槍は、折れておらぬ……！！」

弱き民を虐げる暴力。

師である信玄からの教えもあつたが、何より彼自身が最も嫌う所のそれを平然と行う連中に対し、幸村は凄まじい怒りを覚えていた。

故に、倒れる訳にはいかない。

ここで倒れては、また無辜の民草が虐げられる。

「うおらあ!! うおらああ!!!!」

雄叫びを上げ、幸村は闘気を全面に押し出す。

「——へっ! そこまでにしときな、兄ちゃんよお」

「何を……ッ!？」

「へ? あれれ?」

遠呂智の兵が、少女を人質^{フロン}にしているではないか。

「大人しくしねえと、この嬢ちゃんの命はねえぞ?」

「な、何と卑劣な!! 貴様らそれでも一端の武人か!？」

幸村の怒声に遠呂智軍は下卑た笑みを浮かべ、声を出して嗤う。

(あるえー? なんですかこの状況?)

が、渦中にあつてフロンは至極呆然としていた。

実際の所彼女のレベルは——最前線で戦うラハール達にはやや劣るものの——既に魔神といっても差し支えないクラスで、ラハールの父クリチェフスコイが封じた超魔王・バールとの死闘においてもラハールやエトナと共に戦った面子の一人である。

つまり、この程度の連中であればフロン一人でも充分に対処出来るのだ。

（——はっ！？　もしかしてこれは、人間界という所の『囚われのヒロイン』！？）

そんな訳で、ただただ呆然としていたフロンは突然そんな事を思いついた。

（じゃ、じゃあもしかして、『アレ』をやっているんでしょうか！？）

一人で勝手に興奮しながら、フロンは自己完結する。

そしてその場の会話の間を見計らって、声をあげた。

「あーれー！　たーすーけーてー！」

「なっ！？　き、貴様ら！！　その少女から手を放せえ！！！」

「放すかよ、何せ人質なんだからなあ？　アッハッハッハッハッハッ！！！」

（すごおい！　わたし、本当のヒロインみたいです！！）

動揺する幸村と嘲笑う遠呂智の兵を見て、フロンはますますノリ気になる。

「いーやー！　だれかー！」

わざとらしく身体を動かしながら形ばかりの抵抗をしていると、青年はますます焦り遠呂智軍はますます嗤う。

なんかドンドン楽しくなっていたフロンだったが、

H A S H A H A H A H A H A ! ! !

突然響いた高笑いに、周囲諸共視線を向けた。

「カヨワキモノノコエガスルトキ、ウチュウノハテデモカケツケル」

「悪がこの世にある限り、オラ達の戦いは終わらない!!」

今度は、その体軀には不釣り合いと思える程に巨大なハンマーを携えた少女が。

「異界の果てであろうとも、正義の心は潰えずに!!」

次に姿を見せたのは、ラハールが見たら「うげえ……」と声を洩らしながら後ずさりするであろうボディの女性。

「勇者の名を！ 正義の心を！！ 熱きはあを
示してみせる！！」

更にもう一人、ラハールが見たら「ぐお……！」と声を洩らして洗面を作るであろう、中々に際どい装束で槍を携え、何故か蝶っぽい仮面をつけた女性が。

「地球勇者キャプテン・ゴードン！ 求めに応じて只今参上！！」

最後に現れたのは、もう随分と見なかった男。

「な、なんだアリヤ!？」

「あー! ゴードンさんジェニファーさんサーズデイさんずるいですー!! 私も混ぜてくださいー!!」

「変態だ……変態がいる」

「ウホッ、いい女じゃねえか」

「おおっ!? かつちよいいでござる!!」

突然現れた集団に、反応は様々だった。

「おおっ! そこに囚われているのは、懐かしくもフロンくんではないか?」

「はっ! そうでした! あーれー!! 助けてー!」

思わずテンションが上がっていたフロンは、慌てて芝居を再開した。そしてそれに調子よく乗ってゴードンは口上を続ける。

「少女を人質にとるとは、愚にもつかぬ外道め! このキャプテン・ゴードンが成敗してくれる!!」

「ほざけ! おいテメェら、いつまで呆けてやがる! さっさとあの人間どもを八つ裂きにしろ!!」

将らしき遠呂智軍の一人がそう叫ぶと、兵たちは慌てて武器を構える。

「愚かな……悪は栄えぬ事を、我が槍に貫かれて知れい!!」

「米に変わって、せーばいだべ!!」

「ピロピロ……セントウモードニコウシマス」

「行くわよ、ゴードン!!」

「うむっ! 真・地球勇者ゴードンファイブ、出撃だ!!」

ゴードンがそう叫んだ瞬間、五人の勇者は一斉に宙を飛んだ。

おいでませ無双世界 その四（後書き）

フロン 堕天使

ラハールと一緒に別次元へ向かった…筈が何故かはぐれた。通称愛の伝道師。けれどオタク。元は天使。けれどオタク。今は堕天使。そしてオタク。

ゴードン 地球勇者

地球侵略を目論んでいる魔王がいると聞きつけ出陣。第37代地球勇者…魔界ではラハールの下僕です。

ジェニファア 地球勇者の妻

ゴードンの頼れる相棒兼妻。古武術であるマーシャル・アーツの使い手。天才的科学者であり同時にマッドサイエンティスト。

サーズデイ 高性能ロボット

ジェニファア製作の万能無敵ロボット。見た目と裏腹にけっこう脆かったりそうじゃなかったり…。

真田幸村

無敵の熱血魂をたぎらせる武田の若虎。フロンや星に負けず劣らずのキワモノ好き。周囲は最早（見た目、行動的に）敵だらけ。

超雲 子龍／星

後世に五虎將軍としてその武名を轟かせる蜀の武將。キワモノ好きらしく、フロンや幸村とは何か通じる様だ。

いつき

一揆衆を率いて遠呂智に齒向かう少女。ヒーロー物が好きなのか、

ゴードンの仲間に加わる。どこからともなく雪を出現させる力は、
魔界でいうクールに通じている(?)。

書き上げてから自分の悪ノリ加減に気付いた……orz
反省はしている。後悔はしない。

次回の中心は『伊達男』と『母』です。
誰の事かは……お楽しみという事で。

まじわる武人と運命と その一（前書き）

*一部、無双OROCHI・三国無双・戦国無双の各シリーズに登場していたキャラと同名のキャラが出ますが九割方オリキャラです。お間違えの無いようにお願いします。

まじわる武人と運命と その一

「HA! It、s show time!!」

漢中の要所、定軍山。

峰々が数珠の様に連なり、広大な森林が延々と続くその山を舞台に、爽快な男の大音声は青い稲妻と共に轟く。

「政宗様!!」

「心配すんな小十郎! もっと派手に行こうぜ!!」

蒼白い電光が走り、その男——伊達政宗は、腹心の片倉小十郎にそう叫び、斬りかかってきた遠呂智の兵を切り捨てる。

「こんなモンじゃねえ! もっと熱くしてみせろよ! Let、s Party! Yeah-HA!!」

日の本は奥州において、独眼竜の異名を取った彼もまた、遠呂智によつてこの異空間に現れ、遠呂智の猛攻に晒されていた。

守るべき民草の為、そして己が矜持を貫く為——政宗はこうして、遠呂智の勢力に歯向かい続けていた。

「筆頭オ! 連中は他の二つの山にも陣を敷いてるみたいですぜっ!!」

リーゼントの厳つい強面の男がそう叫ぶと、政宗は口笛を一つ吹いて怒鳴る。

「OK! Are you ready Guy s!?!」

「YEAH!!」

「HA!! この独眼竜の牙、その身で味わわせてやるぜ……Ge
t up!!」

「報告します。 敵はまっすぐと、この山に向かって進撃中」

「そうか……伏せてある弓兵に通達。 敵の半数が過ぎた所で矢を
射かけろ」

将帥の席に座した男性がそう呟くと、伝令兵は一礼してから天幕を
後にする。

「さて、これをどう見る？ 太史慈よ」

傍らに置いてある兜を手に取りながら、鎮圧部隊の長である彼――
源義経は、席の一つに座る男性に問いかけた。

「恐らく、敵はこちらが本陣だと察知した上で攻勢を仕掛けたので
はないかと……」

太史慈と呼ばれた男性はそれだけ言って、自らの得物を手に取り天
幕の外へと歩き出す。

「おいおい？ 何処に行く気だよ」

「敵が向かってくるというのなら、それを打ち砕くのが俺の努め。
ただそれだけだ」

「……ハッハッハ！ 成程、アンタらしい言葉だ」

見た目相応の笑みを浮かべると、義経は自身よりずっと大きい太史慈の背をバシバシ叩き、入口付近においてあった刀を取って彼より先に天幕の外へ出た。

「オメエら！ 敵はこっちに向かってきてる！！ 存分に暴れてやりな！！」

「……大將自ら出陣するつもりか？」

「アンタや弁慶にばかり戦わせてると、こっちが暇で仕方ねえかな」

骨をバキボキ鳴らしながら、義経は鞘から愛刀の鬼丸を抜き天に向かって掲げた。

刀身が陽光を浴びて燦然と輝き、義経自身が纏う煌びやかな鎧にも日の光が反射し光り輝く。

「伊達だか竜だかしらねエが、俺らに立てつこうなんて馬鹿をぶっ殺してやるうぜー！！」

義経の言葉に、遠呂智軍は声を上げて士気を一挙に高める。傍らでその光景を無言で眺めていた太史慈は、憎しみを噛みしめる様な苦々しい面持ちをしていた。

「オメエら！ 気合い入れろ、気合い！！」

「了解！ ブッ込んでいきます！！」

先陣を駆け抜ける政宗を追いかけながら、小十郎は怒声を張り上げつつ手近な敵を切り捨てる。

「政宗様、あまり無茶を……！？」

顔を前に向けた瞬間、何かが迫り来るのを見て取った小十郎は太刀でそれを受け流す様に構える。

途端、襲い来る衝撃に小十郎は意識を飛ばしかけた。

「クッ……」

が、奥歯を噛みしめて意識を振り絞り、渾身の力で『それ』を弾く。すると黒い影を地面に落としていたそれは宙を舞い、轟音と共に大地を踏みしめた。

驚く程に巨大な体躯と、背中から覗く幾つもの得物。

薙刀に似た物を片手に携えながら、白亜の頭巾を被るそれは大音声をまき散らした。

「——オオオオオッ！！」

「チッ、テメエも遠呂智の手下か……！？」

「否！ 我が主は義経様を置いて他になし！！」

嘗て一度だけ見た事のある本願寺の荒僧に似た装束の大男は、そうして得物を頭上でブンブン振り回し、地面に突き立てて叫んだ。

「我が名は武蔵坊弁慶！！ 此处より先を通りたくば、我を超えて見せよ！！」

「チッ！ テメエの相手をしている暇はねえんだ……そこをどけ！」

「ハッ！！ 所詮はじゃじゃ馬の腰巾着か！？」

鼻を鳴らして弁慶が笑う。

「——アア？」

途端、冷たい空気がその場を支配した。

「独眼竜だか何だか知らんが、所詮口先だけの下郎に我が主が後れを取る訳があるまい！！ 貴様らもすぐにその男の後を追わせてやるうー！！」

「……上等だ、クソ坊主」

弁慶の言葉に対し、小十郎は小さく呟く。

それを見て、周りにいた伊達軍の兵士は、弁慶に対する怒りよりも小十郎に対する恐怖の方が先に湧きあがった。

「や、やべえ……あいつ死んだ」

「お、おいつ！ 今ならまだ間に合うから、さっさと謝れ！！」

何故周囲の敵が必死になるのか、弁慶は理解出来なかった。

——が、すぐにその理由は明らかになる。

「……………ハハ、聞こえちまったぜ」

目の前の——弁慶から見れば——小男から発せられる、

「緒の切れる音が……」

周囲を包み込む程の覇気と、

「――ぶつ殺す!!!」

途方もない怒気だった。

堅牢を誇る江戸城は、遠呂智による異界との繋がりによって狂い始めた天候の影響を受け、一年中雪が降り続く白銀の世界へと変わっていた。

その地下に設けられた牢獄に、一人の少女が囚われている。

「……詠、ちゃん」

儂げな印象を与える容貌は裏れ、目の下にはうつすらと隈も見える。すっかり衰弱しきっている少女、董卓は、何処とも知れぬ戦場に駆り出されているのだろう自身の親友の身を案じていた。

「ふぁー、あ。　はあ、暇だぜ……」

見張り番の遠呂智の兵の一人がそう言って、退屈そうに欠伸を洩らす。

するともう一人の兵が何を思ったのか、不意に桶に水を張った。

「ああ？ 何やってんだお前」
「暇つぶしだよ、暇つぶし」

言つて、その兵は水の入った桶を月——董卓の真名——の入っている牢の前に持っていくと、

「——ッ！？」

次の瞬間、盛大にその中身を月に向かってぶちまけた。

「オラオラア！ ちったあ泣き叫んでみやがれ！！」

「へえ……こりゃ面白そうだ。おい、俺にもやらせろよ！」

言つて、それを眺めていた兵も牢に近寄ると、その鉄格子を喧しい音を立てて蹴り出した。

「ハッハッハ！ 小さくなって震えてねエで、ちったあ反抗してみやがれ！」

「こちとら退屈でしゃーねーんだからな！ 暴虐の君主さんよお！」

冷え切った体に水を浴びせられ、鉄格子を蹴破りそうな騒音や煩い罵声に怯え、月はただ震えるしか出来なかった。

自分は、弱い。

たった一人では何一つ出来ない。

そう自覚させられる様で、そう罵られている様で、月は怖くて、その身を抱く様に蹲る事しか出来なかった。

「ハッハッハ————あア？ 誰だデメエ」

不意に、騒音が止んだ。

何事かと思いい月が顔を上げると、二人の遠呂智の兵が自分の檻に背を向けて誰かと話している様だった。

「あアッ!？」

「ッ!」

突然、兵の一人が怒声を上げる。

月はビクリと身体を震わせた。

「遠呂智の指示だ。その女を別の場所に収容するから、さっさと檻を開ける」

凜とした女性の声で、そう言っている。

見れば先の兵士二人は、何処か釈然としない様子ではあるが洪々と鍵が置いてあるのであろう机の方に向かっていている。

月が見上げる様にして女性を窺う。

「これよりお前を大阪城に移送する。速やかに出る」

革のマントを纏い、茶色の髪を短く切ったスレンダーな女性。年は二十代半ばといった所で女性にしては中々の長身。身体にフィットした服を着ており、むき出しの二の腕には刺青を入れてある。

「あ、あの……………」

「早くしろ。貴様以外にもあと二人と一緒に護送しなければならんだ」

言って、女性は身を翻して外へ向かおうとする。

「ま、待って下さい！」

「ん？ 何だ」

「……お名前を、聞いてもよろしいでしょうか？」

先の兵士と違い、その女性には明瞭な侮蔑や敵意といったものは月には感じられなかった。

恐る恐る月が尋ねると、精悍な戦士を思わせるその女性はただ淡々と名乗った。

「——グエン」

まじわる武人と運命と その一（後書き）

伊達政宗

遠呂智に齒向かう奥州の独眼竜。武田の将・真田幸村とは永遠のライバル関係にある。

片倉小十郎

政宗の忠臣にして伊達家の縁の下の力持ち。普段は血気にはやる政宗を止める役だが、実はキレると一番手に負えない。

源義経

源平の争乱において大活躍を見せるも悲劇の最期を迎えた闘将。遠呂智によって復活させられ、その闘争心を満たすために戦場に身を投じる。

武蔵坊弁慶

義経の忠臣。恐るべき巨体と凄まじい力の持ち主。主に対する忠義心の塊で、義経の為なら如何な事も厭わない。

董卓 仲穎 / 月

囚われの身の姫君。自分のせいで戦う事を余儀なくされている詠の身を案じている。

今回はギャグパートを抜きにしてみました。

うん、正直途中からこれディスガイアじゃねえなって思いましたよ。

次回は……………魔女と魔神からの風来坊です。

まじわる武人と運命と その二（前書き）

* キャラの性格及び口調が一部おかしいかもしれませんが、予めご了承ください。

まじわる武人と運命と その二

「……へえ？ それでこの子たちを拾って来たんだ」

際どい装束の女性はそう言って、思い思いに過ごすエトナ達に視線を向けた。

ブリニー達は女性が放つ魔力に当てられ、気分が悪そうにゲッソリとしている。

「そ。で、アタシはエトナ。 アンタは？」

「アタシ？アタシは姐己様よ」

言って、姐己はエトナの肢体をジロジロと眺める。

「随分と貧相なラインなこと」

「……言ってくれるじゃないのこのアマ」

エトナの睨みもどこ吹く風とばかりにフン、と鼻を鳴らして嘲笑う姐己。

相当な自信家なのか、姐己は薄い笑みを湛えたまま青年の前に立つ。

「で？ 反乱軍は一人残らず殺せた？」

「致命傷は与えた……が、聊か手強くてな」

逃げられたよ、と肩を竦めて青年がばやくと、心底つまらなさそうな表情を浮かべて妲己は「まあ、いいけど」と青年に背を向けた。

「次は荊州の敵を殺してくれる？」

「荊州……？」

「そう。あそこを根城にして反抗してるオバサンがいるから、さつさと殺してきてもらえるかしら？」

口調こそ穏やかだが、明らかな上からの態度を取る妲己。それを見て何を思ったのか、青年は一つ笑みを零した。

「フン。盟友遠呂智のたつての頼みとあらば、断るのも悪いな」
「ちよつとお！ 遠呂智『様』でしょ？ 遠・呂・智・様！」
「呼び方一つ、そんなに気にする事もないのでは？」

ふと、そんな声が投げかけられた。

「もうっ！ 半兵衛さん、どっちの味方なのよ？」

竹中半兵衛。

またいけすかない奴が来たか、と青年は鬱陶しそうな顔をした。

それを見て、半兵衛もまた困った様な視線を向ける。

「そんな露骨に嫌な顔をしないでもらえるかな？ 司馬懿仲達くん」
「……知らぬ顔の半兵衛様ともあろう御方が、私如きに何用か？」

露骨に顔を歪ませて青年——司馬懿は手に持った巨大な鉄扇を広げ口元を覆った。

「ふう、やれやれ……先行きが危ぶまれるね、これは」
「先行き？」

「そうよ。これから司馬懿さんには、半兵衛さんと一緒に行動してもらってから」

続く旦己の言葉に、司馬懿は僅かに目を見開く。

曰く、「正気か」とでも言いたげなその視線に気づき、旦己はニンマリとした笑みを浮かべた。

「じゃ、頑張つてね」

旦己は背を向けて広間を後にする。

それが消えない内に、司馬懿もまた広間を後にしようと歩き出した。

「次の戦について、少し話したいんだけど？」

「勝手にやれ。　僕の邪魔をするな」

背を向けたまま言って、司馬懿は乱暴に扉を開けて歩いていく。

遠ざかる背中を眺めながら、半兵衛はため息を洩らした。

「陛下。　こちらに居られましたか」

「ん？　……ああ、アッシュか」

満月が浮かぶ満天の星空の下、城壁の上に立ったラハールは声だけ反応し、視線も向けないまま空を眺めていた。

「他の連中はどうした？」

「ジンと夏侯惇さんと夏侯淵さんはまだ酒かつ喰らってます。　セラちゃんは眠いからって先に寝ちゃいました」

悪魔に基本的に睡眠はあまり必要ない。

余程消耗していた、とかそういった理由があるなら別だが、普段は嗜好の一つとして、あるいはリズムを整える為にラハール達もそれなりに睡眠を取っている。

余談ではあるが、嗜好の一つとして魔界で睡眠が流行りだしたのは――当時はまだある事情からさる悪魔に従っていた――エトナの毒によって二年近く眠り続けていたラハールが目覚めた後も度々睡眠を取る様になったのが発祥とされている。

何だかんだ言って、悪魔にもミィハーな連中は結構多いのだ。

「どうしたんですか？」

「……フン。 さっさと出てきたらどうだ？」

虚空に向かつて、唐突にラハールが吐き捨てる。

瞬間、アッシュは突然感じた膨大な魔力に思わず武器を構えた。

「落ち着けアッシュ。 こいつは少なくとも敵ではない」

言って、ラハールは空に視線を向ける。

正確には、虚空に突如として出現した人物に向けて、だが。

「何者だ？」

「大天使ラミントンの近衛兵第一分隊隊長、超級天使兵。 与えられた名は『ルシファー』」

赤紫色の髪を夜風にそよがせ、純白の大翼を広げてルシファーは名

乗った。

「天使？ つう事は、天界も絡んでるつてのか？」

「それを調べるのが俺の役目だ。そして、貴様の動向を監視する事もな」

キツと、鋭い眼光をラハールに向けるルシファー。

それを真正面から受け、しかし臆した様子もなくラハールは笑みを浮かべた。

「あの大天使が態々出しゃばる所を見ると、どうやらそちらにも連中が出た様だな」

「ああ。そのルートを辿り、俺はこの世界に来た」

「それで？ この世界は一体何なのだ？」

「答える義務はないんだが、折角だし教えておこつ」

両者が会話をする中、アッシュは訝しむ様な視線をルシファーに向けていた。

元来、彼は天使という存在がどうにも信用ならなかった。

その元凶は間違いなくあの天使とは思えない程の強面だった男。ブルカんだかバルカんだか忘れたが、いずれにしてもアッシュにとって忌まわしい存在である事に変わらない。

先代王クリチエフスコイと共謀し、フロンを追放し、ラハールを魔

王に仕立て上げた大天使ラミントン。
一度だけ対面した事はあるが、何を考えているのかさっぱり理解出来ない鉄面皮がアッシュは嫌いだった。

「ほう？　つまりこの世界は、その遠呂智とかいう魔王によって創られた世界という事か」

「そうだ。その本拠はまだ分からないが、恐らくは次元の狭間に固有の世界を持っていると見ていいだろうな」

話を進める内、ラハールはこみ上げる笑みを隠す事無く表情に露わしていた。

「奴は幾つもの世界を融合し、交わる筈がなかった運命を捻じ曲げようとしている」

「その矛先が、オレ様やお前らの所にも向いたという事が……………」

無双の武人達。

世界を融合する魔王。

考えれば考える程、ラハールは楽しくて楽しくてしょうがなくなってきた。

「クツクツクツ……」

肩を震わせ、静かに笑みを零す。

「ハア~~~~ツハツハツハツハツ!!!」

そして他人の迷惑も顧みない大音声で大笑いした。

「楽しそうだな？」

「これが楽しくなくてどうする？ 悪魔とは元来、戦いに生を見出す！ それを理解し、且つ実践する様な者がまだいたとは!!!」

心底楽しそうに言いながら、ラハールはルシファーに視線を向けた。

「ルシファーとか言ったな。 どうだ？ このラハール様と手を組んでみないか？」

「そうしてもいいが……生憎と忙しい身なのでな。 また今度にしてみらえるか？」

あっさりと拒否を示すが、大して気にした様子もなくラハールは鼻を鳴らす。

「あ、そうだ。 ついでだから置き土産を一つやるよ」

「何だ？」

「此処から西に行くと、荊州って場所に出る。 そこに近々『人界の魔王』が出るって噂があるんだが、物見遊山代わりに行ってみたらどうだ？」

「人界の魔王、だと……？」

「名前は織田上総介信長。 その冷酷無慈悲な言動から人は彼を『魔王』と呼ぶ」

「会ってみるといい」と言い残し、ルシファーは再び虚空に消えた。

「陛下……？」

「アッシュ。 オレ様は一眠りする。 目が覚めたら向かうぞ」

アッシュも「何処へ」とは聞かない。

そんな事は、彼の主の顔を見ればすぐに察せる。

それくらいに、アッシュとラハールの付き合いは長い。

雨が降っていた。
灰色の雲が広がる空に、雷鳴が轟く。

「ハア……ハア……ッ！」

男は、その身を引きずる様に歩を進める。
全身に奔る傷も、至る所から滴る血も気に止めず。

「と、し……………まつ……………ねえ、ちゃん……………」

うわ言の様なその言葉を最後に、青年はその身体をどつと倒す。

「キイツ！！ キイツ！！」

彼の肩に乗っていたサルが、必死に彼の顔を叩く。
だが雨はますます激しくなり、雷鳴は近づいている。

小猿の声などたかが知れている。
雨音に、雷鳴に掻き消され、青年の鼓膜を揺さぶるに足る筈もなかった。

「……………キイ？」

砂利を踏みしめる蹄の音が響く。

一歩、また一歩。

「……………ッ！！」

瞬間、小猿は毛を逆立てて必死の威嚇をする。

徐々に近づくその気配は、尋常でない程に凍てついていた。
そう野生の本能が捉え、しかし自分程度では即座に呑み込まれる事
も察せた。

「……………」

それでも、逃げるわけにはいかない。

年来の親友たる主人を見捨てて逃げるくらいなら、せめて最期まで
足掻いてやる。

そういきり立つ小猿は、目の前に現れた男の顔を見上げ――

「ッ！？」

一瞬にして、その覇気に吞まれた。

「……………キ、キッツ!」

「……………我に、抗うか」

鋭く、膨大な覇気。

常人ならば一瞬にして失神するであろうその殺意を全身に浴びながら、しかしその小猿も大したもので、必死の抵抗を示す。

「フーツ! フーツ!」

だが、その小猿を見つめる男の目は酷く冷たかった。

その身を打つ雨よりも更に冷え切った、実に無機質なものだった。

「……………抗え。 風来坊よ」

言って、男は馬首をめぐるせた。

そのまま悠々と、まるで何事もなかったかのようにその場所を後にする。

「……………キイ」

暫くして、小猿は再び青年に向き直る。

そつと、その小さな手を青年の顔に当て、僅かでも温もりを取り戻してほしいと希う様に見つめる。

雨は、どこまでも冷たかった。

まじわる武人と運命と その二（後書き）

司馬懿 仲達 / -

華琳亡き後、曹魏を纏めて遠呂智軍と同盟を結んだ人物。淡々伶俐とした策謀家だが、その胸中に秘めた思いは人一倍強い。

竹中半兵衛

司馬懿の監視役として妲己が送り込んだ軍師。戦国最高の知略を誇る。

妲己

遠呂智の参謀。人の苦しむさまを見るのが何より楽しみという悦楽主義者。自身の知略を過信している所がある。

ちよいとペースを上げるのは厳しいこの頃。

次回は反乱軍そっちのけで魔王VS魔王VS魔神の予定です。

まじわる武人と運命と その三（前書き）

*そろそろ全ルート同時進行が難しくなってます。

まじわる武人と運命と その三

「——— っ たくっ！ あったま来るわねあの女！」

槍を肩に担ぎながら、エトナはそう愚痴を洩らしつつ腰に手を当てた。

その足元には、無数の兵達『だった』肉塊が転がっている。

「それにしても…… ホンット齒ごたえのない連中ばかり」

呆れた様にばやきつつ、エトナは振り向きざまに剣を振り上げていた兵士の胸を貫く。

素早く引き抜き、血飛沫を浴びない様にその身体を蹴飛ばした。

「おやおや、随分と頑張ってるっしょるんですねえ」

ふと、そんな間の抜けた様な声がエトナの耳に届く。

振り向きながら視線をやや下に向けると、初めて会った時から変わらない眠たそうな半目の少女がそこに立っている。

「程？…… だつたっけ？」

「はい正解です」

パチパチと手を叩く程？が、エトナは若干苦手だった。
フロンとはまた違ったマイペースさ加減が、どうにも読みづらい。

そんなエトナの心中を察したのかどうなのか。

「風。あまり出張るな」

まるで図った様に司馬懿が現れる。

「出張るも何も、この別働隊の指揮は仲達さんから直々に風が一任されているのですよ？」

「ならば後衛に陣を構えてそこから指示を出せばいいだろう。特別武に秀でている訳でもないのに、わざわざ的になるつもりか？」

侮蔑する様な司馬懿の言葉に、しかし風——程？の真名——はフフツと小さく笑う。

「……何が可笑しい？」

「いえいえ。素直に『君が傷つくのが怖い』とでも言って頂ければ、風も少しは素直になる用意があるのですよ？」

「馬鹿馬鹿しい」

心底からそう思っているのか、司馬懿はそう言ってさっさと歩を進めた。

「……ああ、そうだ。それよりもエトナ」

「何よ？ まさかまた雑用言いつける気？ 言っとくけど、こんな雑魚の相手は願い下げだからね」

「それなら心配には及ばんさ」

ニヒルな笑みを浮かべて、司馬懿は口を開いた。

「左翼の別働隊からの報告だ。『空を飛ぶ子供』が現れた、とな」

「フン！ 随分と手ごたえのない奴らだな」

「……や、だからこいつらはレベル2ケタばかりなんですから、当たり前でしょう」

荊州で行われていた遠呂智軍と反乱軍の戦に割り込みをかけたラハール達は、とりあえず異形の兵——遠呂智に仕える尖兵——を葬る事にした。

人間を殺してしまうと——既に異世界なのだし別魔界の干渉を受けているのだから手遅れだとは思うが——タイムパラドックスが起き

る可能性も否めない故の配慮だった。

最も、それもセラが「後でフロンさんにチクリますよ?」と満面の笑顔で言わなければラハールは歯牙にもかけなかっただろうが。

「それにしても、ホントにあの天使の云う事を信じるんですか?」

「……アッシュ、貴様は何も感じないのか?」

酷く呆れた様にラハールが言う。

「先程から感じる、この身を切り裂く様な鋭く膨大な殺気……常人ならざる者が放つ、人間にしては稀有な、汚れなき邪念……これ程までに素晴らしいモノを、オレ様は魔界でも感じた事はないぞ」

「真の悪魔は、無限の欲がひしめく人界にこそあり……という事ですか?」

「ああ。しかもその姿を見せずしてこれだけのモノなのだ。姿形を表せばさぞかし膨れ上がる事だろう」

「クツクツク……」とラハールは悪魔らしい笑みを浮かべる。

ああまた始まったよこの戦闘^{ケンカバカ}狂は、とアッシュは決して面と向かつては言えないだろう事を心中で零した。

と、刹那――

「——ムッ!？」

「ちょ、これって……!!！」

突然、降って沸いた様に現れた魔力に二人は顔色を変えた。

「ギガファイア!!！」

聞き慣れた声音と共に放たれる、紅蓮の火球。
瞬間的に空へと逃げたラハールは間一髪かわしたが、唐突過ぎて動けなかったアッシュはもろに直撃を受ける。

「ぐわーっ!!！」

耐えきれず、アッシュはそのまま吹っ飛ばされた。

「アッシュ!？」

「スキありっ!！」

一瞬気を取られたラハールは、しかし高速で迫るその物体を魔王剣で薙ぎ払う。

「一体、どういっつもりだ……!?!」

ギロリ、とラハールは憤怒に滾った目を向けた。

「エトナ!!」

「疾っ!!」

「覇ッ!!」

同じ様に、遠呂智に与する司馬懿と共闘を宣言したエトナに味方したザンと、ラハールに付き従うジンもまた死闘を繰り広げていた。

速さと力、それぞれのぶつかり合いに周囲の木々は吹き飛び、気流は渦巻く。

「血が滾る……やはり命を賭けた闘いこそ、我が生きる場所也!!」

「……往くぞ、ジン!!」

「応ッ!!」

拳と拳がぶつかり合う。

それだけで岩が砕け散り、周囲の大地が抉れる程の膨大な気が激突した。

右翼より荊州の城を攻めるのは、主君である孫策を囚われ遠呂智に降伏を余儀なくされた呉の武人、甘寧。

それに拮抗するのは、反乱軍の救援に來た反遠呂智軍の將、夏侯惇。

「ッ！ お前程の武人が、何故遠呂智如きに屈する！！」

「黙れ！！ 貴様ら如きに、蓮華様の苦渋が理解できるか！！」

その鈴の音を聞いたが最期、黄泉路を惑う事になるとまで謳われる甘寧の武技を、しかし魏武の大剣を自負する夏侯惇は真正面から弾き返す。

「囚われた孫策様を救う為、蓮華様の憂いを払う為……私には、この生き方しか出来ぬのだっ！！」

神速の勢いを以て突っ込んだ甘寧の一撃は、裂帛の一撃を以て迎え撃った夏侯惇と鏖せり合う格好となった。

「ッ！ 貴様の背負うモノの重さも確かに分かる……だが！」

ギリ、と夏侯惇は奥歯を噛み締める。

「だがそれでも——この身は魏武の大剣！ この命は魏武の物！
！ 何人たりとも、華琳様のお許し無くしてこの身を切り裂く事は
叶わん！！」

咆哮と共に甘寧を弾き飛ばした夏侯惇は、続けざまに大上段から叩
きつぶさん程の勢いを以て甘寧に斬りかかる。

——が、

「これはイカンなあ」

スルリと、何かが忍び込んだ様な声音と共に感じたその気配に気づ
いた時。

「が……ア……！？」

夏侯惇の腹を、鋭い『杖』が貫いていた。

荊州の城に忍び込んでいた周泰、字を幼平は、得意の隱密術を以て内偵を行っていた。

囚われの主、孫策を救う為。

その為に彼女もまた遠呂智に従い、司馬懿の指図を受けて動いていた。

心休まる時などありえない。

そう考えていた時期も彼女にはあった。

だが司馬懿の配下になつてから、その考えは一変する。

元々、曹魏の考えを主流とする司馬懿の軍では、將兵にはそれなりの処遇が与えられていた。

その分戦時には厳しいものがあるが、しかし平時には随分と息を抜く事が出来る。

無論、胸中では何時主を救うべきか、という忠義の念があったが、ある日を境にそれも変わる。

『——ただ一人で反逆を企てた所で、潰されるのは目に見えているぞ?』

そう、嘲笑うかの様に司馬懿は言った。

『狩りとは、獲物を絶対に捕えられるというギリギリの所まで引き付ける事こそ肝要。——どうだ？ 私と手を組まないか？』

反乱の意図の暗示。

強かに微笑む彼の手を、しかし迷うことなく明命——周泰の真名——は取った。

「荊州の城に立て籠もる反乱軍を事細かに調べ上げ報告せよ」

司馬懿から下された指示は、それだけ。

明命は、その指示の裏にどんな意図があるのかと探るよりも、まずはその命を完遂する事が重要と考えて内偵を行っていた。

が、

「はうあゝ……」

周囲に鬱蒼と生い茂る木々の陰鬱な様子とはまるでかけ離れた至福の表情を浮かべながら、明命は目の前の動物に心弾ませる。

「お猫様と同じくらいに愛らし……い、いえいえ！ お猫様こそ至上！……ああ、でも……！」

身悶えしながら、明命は目の前に現れた小動物をじつくりと眺める。

全身に茶色の短いフサフサとした毛を生やし、腹の辺りは白い。

首輪の様なものを巻いている所から誰かに飼われているのだろう。

手足は折れてしまいそうなくらいに細く長く、何よりもそのつぶらな瞳に明命は心奪われた。

「こ、この取っておきの煮干しを差し上げますから……ぜ、是非モフモフさせて下さいっ！」

言って、明命はそわそわしながら煮干しを取り出す。

だがその動物は明命の露わになっている膝をぺちぺちと叩き、付いて来いと云わんばかりにシッポを振った。

無論、そんな仕草に明命が耐えきれぬ訳もなく、彼女はのやや小さな身体で激しく身悶えしている。

が、そんな事をしている間にその動物はさっさと茂みの中に入って行ってしまふ。

「ああ！ お待ちください！ どちらに行かれるのですか？」

慌てて明命もその後を追う。

「んしょ……んしょ……」

茂みを掻きわけ、明命は目当ての『あの子』を探す。

——と、その時だった。

「ん……？」

カツン、と何かにあたる。

足元を見れば、そこには刀身が剥き出しの長剣——明命が今まで見た事もない様なくらいに凄まじく長い——が転がっている。そして少し視線を動かした先には——

「ッ！？　だ、大丈夫ですか！？」

見も知らぬ様な異装を纏った青年が倒れていた。

「上総介様、間もなく戦場に到達致します」

傍らに控えた女性の声が聞こえてないのか、まるで気にした様子もなく男は空を見上げる。

「上総介様……？」

不意に、懐から一本の筒——南蛮渡来の技術によって作られた兵器であり、その名を『鉄砲』と呼ばれるモノ——を取り出し、虚空に向けてニヤリと微笑んだ。

「……感じる」

常人には、ただ荒れ狂う様に雨が降っている様にしか見えないが、その男は違った。

彼の両の目には、確かにその遥か先にある光景が見えていた。

「フッフ……ハハハハハ」

「か、上総介様？」

瞬間、男はくわっと目を見開いた。

「遠雷——遙——!!」

轟音。

名の通り、まるで雷の様に響いたそれは違う事無く真つ直ぐに突き抜け——突進していたラハールと迎え撃たんとしていたエトナの間を通り抜けた。

「フハハハハ!! 余は第六天魔王——織田信長ぞ!!」

時代の破壊者にして創造者。
類稀なる才気を持ち、しかし狂気としか思えない所業を重ね続けた
人界の魔王。

男——織田信長の咆哮が、雷をも掻き消して轟いた。

まじわる武人と運命と その三（後書き）

甘寧 興霸／思春

遠呂智軍に従う呉の武人。主・蓮華の為に苦渋を舐め続けている。主への忠誠・熱血ぶりは夏侯惇といい勝負。

周泰 幼平／明命

甘寧同様、主の為に遠呂智に従い各地で隠密・妨害活動を行う武将。可愛いものに目がない。

程？ 仲徳／風

司馬懿と共に各地で反乱鎮圧にあたる魏の軍師。いつも何を考えているのかよく分からない。しょっちゅう転寝する。

織田信長

「人界の魔王」と呼ばれる戦国の魔王。遠呂智に堂々と歯向かい、立ちは大なる障害は全て排除する最強の武人。

戦う事に本懐を見出すのがデイスガイアの悪魔……と考えれば、ラハールVSエトナってのもアリかと思ひまして。

今回はちっちゃな軍師と闘將救出大作戦。あと、そろそろ個別ルートに移行します。

まじわる武人と運命と その四（前書き）

共通ルートはここまでです。

次回からはラハールサイド、エトナサイド、フロンサイドのどこから進めようと思います。

まじわる武人と運命と その四

俄かに降り始めた雨は、轟々と轟く雷と共に大地に降り注ぐ。

荊州の地を濡らすのは、雨と、そして夥しい鮮血。

鮮やかな赤が、一人の女性の下半身を血みどろに染めていた。

「大事ないかい？ 甘寧ちゃん」

キツネ目の、糸の様に細い目をした優男はそう言って、自身の握る杖の先が刺さった女性——夏候惇の背を蹴り飛ばし、杖を引き抜いた。

「貴様……ッ!!」

「コラコラ、んな射殺さん程に睨まんといてえな。なあ？」

腰の辺りを泥に塗れさせながらも、しかし甘寧はその男性を仇敵とばかりにキツと睨みつけた。

雨中、しかも足元は泥濘だらけだというのに真っ白な装束の一部も泥で汚れていない衣服を纏った男性は、ひよろりとしたか細い腕を長い袖から出して、気だるそうに頭を掻いた。

「ちゅーたつくんから伝令。 奴さん方、新手来よったからウチらも撤退せえやて」

「新手だと……？」

「第六天、織田信長。 その暴虐の限りから、人は彼の者を『魔王』と畏怖する」

スルリと滑り込む様にして会話に入った半兵衛は、続けて自身にも向いた甘寧の視線を気にも留めず続けた。

「甘寧君、早雲殿。 貴方方も早々に撤退して頂きたい。 これ以上居続けると、彼らの矛先が此方に向きかねないからね」

「反乱軍は潰さんといてええんかあ？」

「連中は城を放棄した。 僕らがすべき事はもう何も残っていないよ」

肩を竦めてそう言って、半兵衛は身を翻した。

荊州の上空では、ラハールとエトナが凄まじい攻防を繰り返していた。

ラハールの魔王剣が唸りを上げて迫れば、エトナがグングニルを利用していなしギガファイアを放る。

それに応える様にラハールもギガファイアを唱え、火球が激突した瞬間にはその業炎の中からラハールが突進してきた。

が、それを見越していたかの様にエトナは回避行動を素早くとり逃げる。

「ええいつ！　ちょこまかと動くな！！」
「敵に意見してどうするんですか……」

呆れた様にエトナがぼやく。

「男なら正面からどーんとぶつかってこんかつ！！」
「アタシや女ですよっ！！」

憤慨した様にエトナが叫んだ瞬間、再び遠方の雷鳴が響く。
次の瞬間には鉛の様な弾丸が迫り、一瞬にして去っていく。

「チッ……横合いからオレ様の闘いに水をさすとは、随分と無粋な輩がいたものだ」
「確かに。　ありや少々鬱陶しいですね……」

言葉を交わしながらも、二人の攻防は続く。

「魔力の質から考えれば、恐らくは第六天とかいう奴だろうな」
「第六天……って、それって噂の人界の魔王さん？」

槍を振るい火球を飛ばしながらエトナが問う。
それを剣で弾いてラハールが叫んだ。

「エトナ、勝負は暫しお預けだ」

「はい？」

「人界の魔王……どれ程の者が、オレ様が直々に確かめてやる！！」

「え、ちょ、陛下！？」

エトナの言葉も無視してラハールはマントを広げると、まるでジェット機のように飛び去っていく。

その背を暫し呆然と見ていたエトナは、そこに至って漸く味方が撤退しているのを視認した。

「……帰ろ」

呆れた様に呟いて、エトナも翼をはためかせて自陣へと戻った。

所変わって、信濃、上田城。

その地下牢に、一人の女性が囚われていた。

（桃香様……………）

女性はその名を関羽雲長。真名を愛紗。
史実において無類の武を誇ったその勇名は、性こそ違えど彼女もまた等しい。

しかし突如現れた遠呂智ら異界の軍勢に主を囚われ、味方は散り散り。自らも囚われ、この上田に幽閉されていた。

彼女の胸中を占めるのは、己の無力さであり、遠呂智への憎悪であり、義姉、義妹の安否であった。

（鈴々……………）

心優しき姉を奪われ。

快活に笑う妹を奪われ。

ギリツ、と愛紗は奥歯を噛み締めた。

必ず此处を出て、遠呂智を殺す。

義姉の建てた国を滅ぼしたあの外道を殺すまで、死ぬ訳にはいかない。

心の中に燦ぶるその炎は、静かに光を帯び始めていた。

「な、何だ貴様……！何を……ギャア!?」
「ヒ、ヒイ……！！ぐわあああ……！」

男の悲鳴が響く。愛紗が思わず見張りへ眼を向けた。

するとそこには力を無くして倒れている、二人の見張りの姿。そして見慣れない装束に身を包んだ、三人の『人間』と一つの『物体』が立っていた。

「大丈夫ですか？」

「サースデイ、この檻のカギを開けて頂戴」

「ピロピロ……ロック、解除シマス」

「んじゃ、ちゃっちゃと片づけて脱出しようぜ」

戸の開いた檻に入り、胸に革製の帯の様なものを巻いた少女が自分の腕を縛る鎖を引き千切った。

「そなた達は、一体……？」

「詳しい説明は後でするわ。兎に角、今は此处を脱出しましょう」

やたら露出の多い服を着た女性——ジェニファー——がそう答え、次いで黒と緑の斑の装束に身を包んだ男が、スッと愛紗の前に立つ。

「あんた、関羽さんだよな？」

「ああ……………」

「一つ言っておくけど、あんたの主——劉備さんは、生きてるよ」

瞬間、愛紗の目が見開かれた。

敵に隙を突かれ、地面へ倒されていく自分の身体。その目の前で主は押し倒され、敵に囲まれていく。

彼女の悲鳴を聞きながら、自分は気を失ってしまった。

あの状況では助からない。途方も無い絶望感が容赦無く自分を襲った。

その主が——義姉が、生きている。

真実ならば是が非でも再会し、己が無力さを謝罪したい。

堪え様のない感情を必死に抑え、表層は冷静さを装いつつ愛紗は口を開いた。

「それは、本当か…………？」

「ああ。んで、あんたにも協力して欲しいんだが」

頭を掻きながら男が頷く。

次いで、少女が顔を覗き込みながら口を開いた。

「私はセリイ、此方はジェニファーさん、サースデイさん、猿飛佐助さん。皆さん、打倒遠呂智の志を持つ仲間です」

言って、セリイは愛紗の得物である青龍偃月刀を取り出し、彼女に差し出した。

「お願いします。私達と共に、戦ってくださいませんか？」

その言葉に返す愛紗の答えは、始めから決まっていた。

異界の果て。
時空の狭間。

何処とも知れぬ場所に聳え立つ魔城——古志城。

その玉座に腰かけた人物——遠呂智は、歪な笑みを口元に浮かべた。

「抗え……無双の英傑達よ」

交わらぬ筈の世界。
会う筈のない英雄。

それら全ての邂逅を導き——そして、異界の魔王さえも現れた。

「見せてみる……貴様らの価値を」

遠呂智の野望は、世界か。

「貴様らの力を」

それとも、最強の頂か。

「その全てを喰らい尽くし……我に、示せ」

その瞳の先は、永久の闇だけが広がっていた。

まじわる武人と運命と その四（後書き）

共通ルートはここまでです。

で、次回からは個別サイドになるのですが……

ぶっちゃけどこから行こうか決めてませんっ！

- 1：ラハールサイド
- 2：エトナサイド
- 3：フロンサイド

参考までに、アンケートの様なものをとろうかと思っています。
もし「。サイドで進めて欲しい」という要望がありましたら、感想の方にお送り下さい。

「アンケートとか取らなくていい」という様でしたら、作者の趣味からエトナサイドを中心に全体を構成しようと思います。

では、またお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9579/>

魔界戦記ディスガイア OROCHI

2010年10月10日19時57分発行